

大学附属図書館における貸出履歴の分析

著者	松野 渉, 本田 咲美, 池内 有為, 佐藤 翔, 逸村 裕
著者別名	Matsuno Wataru, Itsumura Hiroshi
内容記述	2012年日本図書館情報学会春季研究集会. 三重大学, 2012-05-12
発行年	2012
URL	http://hdl.handle.net/2241/117045

大学附属図書館における貸出履歴の分析

松野 渉 (筑波大学大学院図書館情報メディア研究科) †
本田 咲美 (筑波大学情報学群知識情報・図書館学類)
池内 有為 (筑波大学大学院図書館情報メディア研究科)
佐藤 翔 (筑波大学大学院図書館情報メディア研究科)
逸村 裕 (筑波大学図書館情報メディア系)

† wataru@slis.tsukuba.ac.jp

抄録

本研究は、T 大学図書館の貸出データを用いた分析を行い、一部の図書への貸出の集中状況について明らかにする事を目的とする。その結果、T 大学図書館では、蔵書全体のおよそ 3% で貸出全体の 80% を満たす事が分かった。この傾向は図書を主題分野ごとに分けた場合でも同様である。出版年別に見ると直近数年に出版された図書については、それ程一部の図書には集中していないが、年数経過に従って集中がより進む傾向が明らかになった。

1. はじめに

本研究は、大学図書館の貸出データに基づき、貸出の状況の把握と、貸出の一部の図書への集中の状況、およびその原因を明らかにすることを目的とする。

大学図書館における蔵書の利用は、一部の図書に偏ることが知られている。Kent et al.(1979)¹⁾や原田(1989)²⁾らの調査によれば、大学図書館における蔵書貸出の 80% は、蔵書の約 20% によって満たされていた。このことは“80/20 の法則”と呼ばれることもある³⁾。

しかし、これらの調査は 1970 年代から 1980 年代に行われたもので、現在の状況は先行研究とは異なっている可能性がある。

2011 年に公表された Ohio LINK の貸出データ分析についての報告⁴⁾では、蔵書の 6% で貸出の 80% がまかなわれているという結果が示されている。しかし、近年、日本の大学図書館における貸出の偏りに関する報告はなされていない。そこで本研究では、T 大学図書館の貸出データを用いて、現在の日本の大学図書館における、図書の貸出の偏りの状況を明らかにすることを試みる。

利用の偏りが大きくなる原因として、特定の主題分野に貸出が集中している、あるいは社会の変化、学問の進展により、新しい図書が優先的に利用される傾向が進んでいることが考えられる。一般に、大学図書館においては新しい図書の蔵書回転率が高く、出版年が古くなるにつれて下がっていくという傾向が先行研究で

示されている⁵⁾。そこで本研究では、分類・出版年別にも貸出の集中状況について分析を行った。

2. 研究方法

分析対象として T 大学図書館の貸出データを用いる。T 大学図書館の 2010 年度の蔵書冊数を表 1 に、奉仕対象者のうち、学部生と大学院生の数を表 2 に示す。また、2009 年度の T 大学における学生一人当たりの貸出冊数と全国平均⁶⁾の比較を表 3 に示す。

表 1 2010 年度蔵書冊数

和書	1,537,891
洋書	1,010,514
合計	2,548,405

表 2 2010 年度奉仕対象者数

学部生	10,026
大学院生	6,657
学生総数	16,683

表 3 2009 年度学生あたり貸出冊数

T 大学	19.5
全国平均	8.6

分析に用いる貸出データは 2006 年 4 月から 2011 年 3 月まで、すなわち 2006 年度から 2010 年度までの 5 年間のデータである。本研究では、利用者が借り出した資料を持ち帰って利用す

る、いわゆる「通常貸出」のみを分析対象とし、一時貸出などは対象外とした。利用者区分については学部生、大学院生、研究生、科目等履修生の貸出データを対象とした。また、出版年および分類別の分析を行うため、出版年が不明確な資料、及び請求記号が付与されていない資料に関しても分析対象外とした。分析対象とした貸出データ件数を表 4 に示す。

表 4 年度別の対象とした貸出データ件数

2006	2007	2008	2009	2010
318,425	323,473	325,605	331,381	302,000

これらのデータを基に、貸出の集中状況、蔵書回転率、貸出上位タイトルを求め、蔵書の利用状況を分析する。

3. 調査結果

3.1 貸出全体の状況

2010 年度の貸出データにおいて累積貸出回数が全体の貸出回数 の 80% に達したのは順位が 41,899 位の時であり、貸出可能な 2,522,585 冊のうち 64,391 冊の図書で利用全体の 80% を占めている。これは蔵書冊数の 2.6% にあたる。他の 4 年を調べた場合も、T 大学図書館では概ね 2.6% から 2.9% の蔵書で全体の貸出の 80% をまかなっているという結果が得られた。

3.2 分野別の貸出の状況

T 大学図書館で用いられている日本十進分類法（以下、NDC）の類目別に、蔵書回転率に関する調査を行ったところ、回転率が極端に高くなっている、または低くなっている類目は見受けられなかった。

そこで、前節で行った調査を各類目でも行い、類目ごとの貸出の集中状況について確認した。各類目の貸出の 80% を満たす為に必要な蔵書の全体に対する割合を表 5 に示す。類目に依らず一部の図書への貸出の集中が起きており、概ね 2.2% から 4.6% の図書で貸出全体の 80% を満たしていた。

貸出の 80% を満たすために必要な蔵書の割合が、蔵書全体で見たときは約 3% だったのに対し、類目別に見た場合もその割合は概ね変わらないという結果になった。これにより、貸出の集中は特定の類目による影響ではないことが明らかになった。

表 5 各類目の貸出 80% を満たす割合

類目	蔵書冊数	貸出 80% を満たす冊数	割合
0 類	244,464	5,258	2.2%
1 類	151,743	4,337	2.9%
2 類	181,579	4,683	2.6%
3 類	539,086	17,271	3.2%
4 類	423,321	13,519	3.2%
5 類	111,688	5,044	4.5%
6 類	64,119	2,289	3.6%
7 類	129,582	5,950	4.6%
8 類	90,492	3,275	3.6%
9 類	156,057	3,931	2.5%

3.3 出版年別の貸出の状況

T 大学図書館の 2010 年度における出版年別蔵書回転率を図 1 に示す。出版年別に蔵書回転率を見ると、図書の出版年が古くなるにつれて蔵書回転率は低下しており、オブソレッセンスが観察できる。

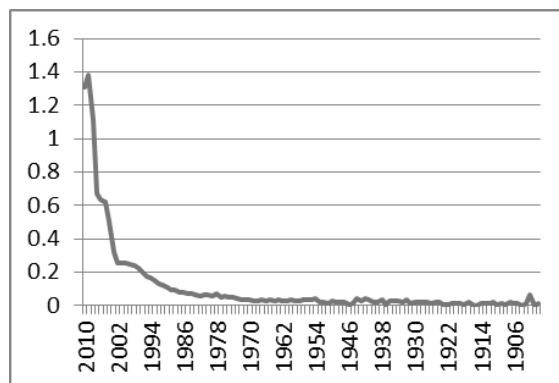


図 1 2010 年度全体の出版年別蔵書回転率

実際に、より新しい図書に貸出が集中しているのかを確認するため、出版年別で見ると貸出の半数を満たすために必要な蔵書は何年分にあたるのかについて調査した。出版年順に 2010 年度の貸出データを並べ、貸出回数を累積した値を表 6 に示す。最も新しい資料から貸出回数を累積した場合、貸出の半数を充足するのは 1998 年出版の蔵書まで、すなわち約 12 年分を累積した時点である。東京大学附属図書館における星野ら(2008)⁸⁾の調査によれば、9 年分の蔵書で貸出の半数を充足していた。これに比べると T 大学の方がより過去の資料まで借りられている傾向があると言える。

表6 T大学図書館貸出データにおける
出版年順累積貸出冊数

出版年	貸出冊数	累積貸出冊数
2010	4,025	4,025
2009	16,467	20,492
2008	15,403	35,895
2007	13,863	49,758
2006	13,857	63,615
2005	12,343	75,958
2004	10,052	86,010
2003	11,714	97,724
2002	10,463	108,187
2001	10,295	118,482
2000	9,735	128,217
1999	9,190	137,407
1998	8,821	146,228
～		
1900	16	276,294

出版年別にも貸出の集中状況を確認した。2010年度の貸出データを基に、2010年から2000年までに出版された図書に関して1年ごとに蔵書の集中状況を調査した。2000年以前に出版された図書に関しては、10年ごとに1950年までの集中状況について調査した。各出版年の貸出の80%を満たす為に必要な蔵書の全体に対する割合を表7に示す。調査の結果、出版直後の数年間は、貸出の80%を満たすために蔵書の約20%程度が必要だが、年数が経過するとともにその割合は低下していき、10年経過する頃には必要な蔵書は全体の5%程度まで落ち込むということが分かった。

3.4 貸出数の多いタイトル

貸出回数の多い図書を集計した結果の中から、対象とした5年間のうち5年とも貸出回数が40回以上に達した図書の書名を表8に示す。このうち『心理測定尺度集』以外の図書は、T大学のいずれかの講義で教科書として指定されていたものであった。また『心理測定尺度集』はT大学所属の教員が監修・著作を行っているシリーズである。このように、教科書に指定されている図書及び、T大学に所属する著者の図書について、貸出回数が多くなっていることが明らかになった。

表7 出版年ごとの貸出80%を満たす割合

出版年	蔵書冊数	貸出80%を満たす冊数	割合
2010	3,082	702	22.8%
2009	11,943	2,501	20.9%
2008	13,948	2,439	17.5%
2007	20,731	2,317	11.2%
2006	22,038	2,636	12.0%
2005	20,181	2,415	12.0%
2004	20,167	2,119	10.5%
2003	36,250	2,464	6.8%
2002	41,257	2,188	5.3%
2001	39,939	2,176	5.4%
2000	38,198	2,147	5.6%
～			
1990	45,406	1,403	3.1%
1980	62,208	1,231	2.0%
1970	53,267	435	0.8%
1960	24,234	141	0.6%
1950	13,150	48	0.4%

表8 貸出が5年間とも40回以上あった図書

書名	各年度の貸出回数				
	2006	2007	2008	2009	2010
人間と社会のつながりをとらえる「対人関係・価値観」(心理測定尺度集2)	82	83	62	60	50
心の健康をはかる「適応・臨床」(心理測定尺度集3)	74	76	59	64	43
人間の内面を探る「自己・個人内過程」(心理測定尺度集1)	96	69	80	51	55
アトキンス物理化学第6版 上	45	60	47	49	54
ロビンス基礎病理学第7版	94	58	85	64	45
アトキンス物理化学第6版 下	40	53	49	42	45

4. 調査結果のまとめと考察

本研究では、T大学図書館における2006年度から2010年度までの貸出データを用い、一部の図書への貸出の集中についての分析を行った。

分析の結果、T大学図書館においては、蔵書のおよそ3%で貸出全体の80%をまかなってい

る事が明らかになった。これは従来説かれてきた「蔵書全体の 20%の図書で 80%の貸出を満たすことが出来る」という法則を大きく下回る結果であり、また 2011 年の Ohio LINK の調査によって示された「6%の蔵書で 80%の貸出を満たすことが出来る」という結果よりもさらに低い結果となっている。

貸出の集中状況について明らかにするため、分野別の貸出の集中、及び年代別の貸出の集中について調査を行った。その結果、分野別の貸出の集中については、NDC 類目の全ての類目で、蔵書の約 2%から約 5%で貸出の 80%を満たす事が明らかになった。

年代別の貸出の集中については、出版から数年間は約 20%の図書で貸出の 80%を満たすが、その後年数が経過するに従って、より貸出の集中が進み、10 年程度が経過した時点で 80%の貸出を満たす蔵書の割合は 5%程度まで落ち込むという結果が得られた。また、出版年から 12 年以内の蔵書で貸出全体の半数を満たしている事が明らかになった。

具体的にどのようなタイトルに貸出が集中しているのかについても調査を行った。その結果、調査対象とした 5 年の中で、いずれの年も貸出回数が 40 回以上であった図書は T 大学のいずれかの学部の授業で教科書として指定されている図書か、T 大学所属の教員が監修・著者となっている図書であった。加えて、5 年間のうち、貸出回数が 40 回を超える年が 4 年あった図書に関しては、その全てが教科書として指定されている図書であった。

以上の調査結果、及び分析結果をまとめる。まず、T 大学図書館においては従来調査に比べ、貸出の集中がより進んでいる事が明らかになった。その理由として、出版年の古い図書の利用がごく一部に限られている事が挙げられる。出版年の新しい図書については、出版直後の数年間は従来調査通りの結果を示している。東京大学における調査では、出版年から 9 年以内の蔵書で貸出の半数を満たしている事が明らかになっているが、T 大学図書館においては、出版から 12 年以内の蔵書で貸出の半数を満たしている。この事からも、出版年が新しい図書については、貸出の集中はそれほど起きていないことが分かる。その一方で、出版年が古くなるにつれて図書は利用されにくくなる傾向にあり、これが一部の図書への貸出の集中が起きている主な理由となっていると考えら

れる。

また、今回の調査の中で明らかになった、貸出が集中している図書の多くは、授業の中で教科書として指定されている図書である。このことから、授業で教科書として指定された、あるいは参考図書として提示された図書は貸出数が増加する傾向にある事が考えられる。この事も含めて、今後、他大学図書館を含めた調査を行い、図書の利用が偏る原因について分析を続けていく。

引用文献

- 1) Kent, Allen et al. Use of library materials: the University of Pittsburgh study. Marcel Dekker, 1979, 272p.
- 2) 原田隆史. 大学図書館貸出データの計量的分析: 上智大学図書館貸出データの分析を中心に. 彦根論叢. 1989, no.260-261, p.83-99.
- 3) F.W. Lancaster. If you want to evaluate your library. 2nd ed, University of Illinois, Graduate School of Library & Information, 1988, 193p.
- 4) ランカスター, F.W. 図書館サービスの評価. 中村倫子, 三輪眞木子訳. 丸善, 1991, 228p.
- 5) Gammon, Julia; T.O'Neill, Edward. OhioLink-OCLC collection and circulation analysis project 2011. OCLC Research, 2011, 73p.
- 6) 松井朗, 磯野肇. 「蔵書回転率」と「蔵書貸出率」を指標とする貸出データの分析調査: 奈良大学における図書館資料利用の傾向について. 奈良大学紀要. 2006, no.34, p.177-190.
- 7) 文部科学省. 平成 22 年度学術情報基盤実態調査. 2011, http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/jouhoukiban/kekka/k_detail/1307341.htm, (参照 2012-04-17).
- 8) 星野雅英, 渡邊真由美, 風巻利夫, 原香寿子. 東京大学総合図書館における入館・貸出統計データ分析の試み: 中央図書館としての役割を考える為に. 大学図書館研究. 2008, no.82, p.1-11.